

第五部会

タバリーのタフスィールにおける

クルアーン解釈理論

澤井 真

クルアーンは、これまで多くのムスリムたちによって注釈が付され、解釈されてきた。こうした聖典解釈は、一般的にタフスィール (tafsir) クルアーンの注釈書) と呼ばれており、これまで数多くのタフスィールが書物として編まれてきた。クルアーンの注釈や解釈においては、預言者ムハンマドのハディース、啓示の状況、さらに日常生活におけるコンテクストもクルアーン解釈の重要な構成要素を成している。

クルアーン解釈において、クルアーンの意味を字義的、逐語的に説明しようとする試みであれ、個人的見解を通して神の言葉を理解しようとする試みであれ、それらの営為は常に一つの解釈となりうる。このことは、アラビア語で下されたクルアーンの「忠実な」翻訳書であっても、一つの解釈の産物とみなされることから理解できる。本発表は、そうした前提に基づいて、初期のクルアーン解釈を代表するタバリー (d. 923) のタフスィールである『クルアーン章句解釈に関する解明集成』(以下、『解明集成』と略記) から、彼のクルアーン解釈のパースペクティヴを理解する。

『解明集成』は、クルアーンの全章句に注釈が施された最初のタフスィールである。こうした点において、彼のクルアーン解釈は「連続的注解のタフスィール」として分類されている。また、彼の注釈書には多くの伝承が引用されていることから、「伝承によるタフスィール」とみなされてきた。

『解明集成』の序において、タバリーはこの書物が当代のクルアーン注釈よりも包括的であること、さらに彼が同意することしなないに関わらず、複数の解釈を紹介し最良の解釈を選択することを挙げている。その際、彼は一般的に「注釈」の意味で用いられている「タフスィール」の語と、「解釈」の意味で用いられている「ターウィール」(ta'wil) の語を使い分けることなく使用している。そのため、タバリー自身が自らの著作を注釈書と捉えていたのか、解釈書として捉えていたのかは判然としない。ただし、彼は個人的見解に基づく解釈に否定的であり、彼が自らの主観性を出来る限り排除する形でクルアーンに注釈を付すことを試みていた。

こうした視点に加えて、彼はクルアーン解釈の三つの側面を挙げることで、自らのクルアーンへのパースペクティヴを提示している。まず、第一の側面は神のみが知る解釈である。クルアーンの中で繰り返し語られる終末の日を知るのは神のみであり、ムハンマドでさえもその兆候を窺い知ることが出来るだけである。第二の側面はムハンマドによってウンマに与えられる説明である。タバリーによれば、クルアーンの中には彼の説明がなければ理解することができない側面があるという。第三の側面は、クルアーンが啓示された言語、すなわちアラビア語を

知る者が行なうことのできる解釈である。このことは、単に言語的アプローチを意味するばかりではなく、様々な修辭法を通して神の意志を理解することができることを意味している。

これらの点を踏まえながら、タバリーは最良のクルアーン解釈へ到る方法として、解釈や注釈に関する明快な証拠の必要性を論じている。その証拠として彼に重要視されたのが「伝承」であった。タバリーのコンテキストにおいて、この伝承の語の範疇は、預言者ムハンマドのハディースと彼の教友や後継者たちのアサル(ahar)が含まれる。このアサルはムハンマドによる伝承ではないが、前代までのクルアーン解釈として重要な情報を提示していた。このように、タバリーは伝承や言語によるアプローチを駆使しながらクルアーンを解釈しようとしたのである。

マイモニデスにおける

イスラーム思弁神学者の神学論議

神 田 愛 子

本発表は、中世の代表的ユダヤ思想家、マイモニデス(一一三五一二〇四)が、ユダヤ・アラビア語で執筆した名著『迷える者の道案内』において、イスラーム思弁神学者(ムタカリムーン)の議論をどのように理解し、評価していたかにつき考察することを目的とする。彼は第一部七十三章において、イスラーム思弁神学者が論証の基盤として用いた十二の前提につ

いて外観した上で、イスラームの教義に関する彼らの論証に関して、世界の時間的生成(七十四章)、神の唯一性(七十五章)、神の非物質性(七十六章)の三つの教義に絞って各章の中で論じている。十二の諸前提の一から九は、主にアシュアリー学派の原子論に負っているようであるが、中世思想史の観点から見ると、ほとんどのユダヤ学者は原子論を受け入れておらず、マイモニデスも七十一章で、原子論は後代の(つまり、古典ではなく)哲学者により偽であると論証されたと述べていることから、彼自身は原子論を支持していたわけではないと推察できる。

マイモニデスは七十一章の中で、ムタカリムーンの議論は、その下位の議論は異なるにせよ、どれも方法として同じであって、想像による議論を知性によるものと称していると論じている。世界の時間的生成についての彼らの議論は、論証、弁証法、詭弁的弁論の違いを知らない者を除けば、疑問を伴う説得力のない論証であると批判する。彼は、正しい論証の方法とは、哲学者が世界の永遠性の理論を築いた方法をとおして、疑問が残らないように教義を確立することであると断言する。これは、彼自身が世界の永遠性を信じていたからではなく、世界の永遠性と世界の時間的生成の議論をすることなく、神の存在、神の唯一性、神の非物質性について論証することこそが、有効で確実な方法であると彼が考えていたからである。(注…)なぜ彼が世界の永遠性の議論を回避するのかにつき、同じ箇所では以下のように説明する。もし世界が時間的に生成されたのであるならば、必然的にそれを創造した存在が必要となる。